訪問看護ステーションポプラ／ホットライン21しおん

症　例　概　要　利用名：女性：70歳代　　要介護5

病名：#1左頭頂葉皮質下出血　#2脳内出血再発　#3関節リウマチ　#4肺気腫

令和元年に脳内出血発症後4回再発し、令和4年12月に#1の診断を受ける。治療後回復期病床に転院されリハビリテーションを行うも全介助状態となり、嚥下障害も残存し胃瘻造設。発語なくコミュニケーションはとれず。長女、長男ともに自宅退院を強く希望され、介護技術の習得のため病院に通う。長女は介護に専念するため退職し、長男は休日に長女に代わり介護を担う。退院後より、訪問看護・リハビリテーション、訪問入浴、訪問診療を利用しご自宅で療養されている。健康なときは自然が大好きで風や草花を良いにおいと笑顔で話されていた。外に出られない状態だったが、外に出て自然を感じて頂くことを目標にリハビリテーションと体調管理を行い、ご本人だけではなく、ご家族もともに笑顔いっぱいになれた症例。

内　　容

脳出血を4度繰り返し、段々と「歩けず・喋れず・食べれず」の寝たきりの状態になっていった。

訪問看護ステーションポプラが介入したのはR5年5月、4度目の脳出血からで、その時の状態は全身の拘縮・痙縮が強くベッド上寝たきり、車椅子乗車は困難、飲食は出来ず胃瘻管理、意識レベルは声掛けに反応や追視はなく表情変化も見られない状態であった。ご家族は30代の長女・長男のみで、長女は仕事を辞め介護に専念し、長男は家計を支えるため出張の多い現場仕事に従事しお休みの日は介護に協力的だった。お住まいはエレベーターの無い集合住宅の2階のためストレッチャーやリクライニング車椅子での移動は容易ではなく、受け入れてくれる通所系サービスはなかった。

訪問看護・リハビリは週2回介入し、介護指導や体調管理、拘縮・痙縮の強い身体のケアにあたった。ご家族も懸命に介護される中で、体調が安定し少しずつ身体がリラックスできている状況を見て、「母はもともと自然が大好きで、外の風や草の香り、太陽の光を感じて喜ぶような人。また昔みたいに車でドライブに連れて行きたい。」と前向きに希望を持つようになった。そこで「ご家族でドライブに行くこと」を夢に掲げ、リラクゼーション＋車椅子乗車に向けたリハビリと、体調管理＋血圧変動に注意しながらのギャッジアップ訓練＋下肢下垂訓練を看護で提供していった。週に2回では足りず、長女ができる訓練を指導し毎日取り組んでいただいた。ケアマネや福祉用具の方とも話し合いを重ね安全で安楽に利用できる車椅子を選定し、乗車訓練を開始。ギャッジアップと下肢下垂の訓練を重ね、徐々に血圧低下や下肢うっ滞が見られなくなった。そして取り組みから1年後の良く晴れた9月、担当看護師・セラピスト・ケアマネ・ご家族で、利用者さんを車椅子ごとかかえ階段を降り、外に出ることが出来た。血圧の低下はなく車椅子にしっかり座り、風を感じ、草花を眺め、ご自分から空を見上げ太陽の光に目を細めていた。その後

長女やスタッフを追視し、一人一人の顔を確認している様子が見られた。タンポポを目の前に置くと、じっと見つめ口角を緩め、その瞬間をカメラに収めることが出来た。明らかに表情が柔らかく変化し、ご自分で首を動かし長女を見た瞬間、その場に居合わせた皆が笑い喜びに溢れた。

この日を境に、声掛けに反応するようになり表情にも変化が見られるようになった。その変化がご家族の介護のモチベーションとなり、これまで以上に介護を楽しまれている。最終ゴールであるドライブまではまだ道のりは遠いが、今後も取り組みを継続し着々と夢に向かってチーム〇様は進んでいこうと思う。